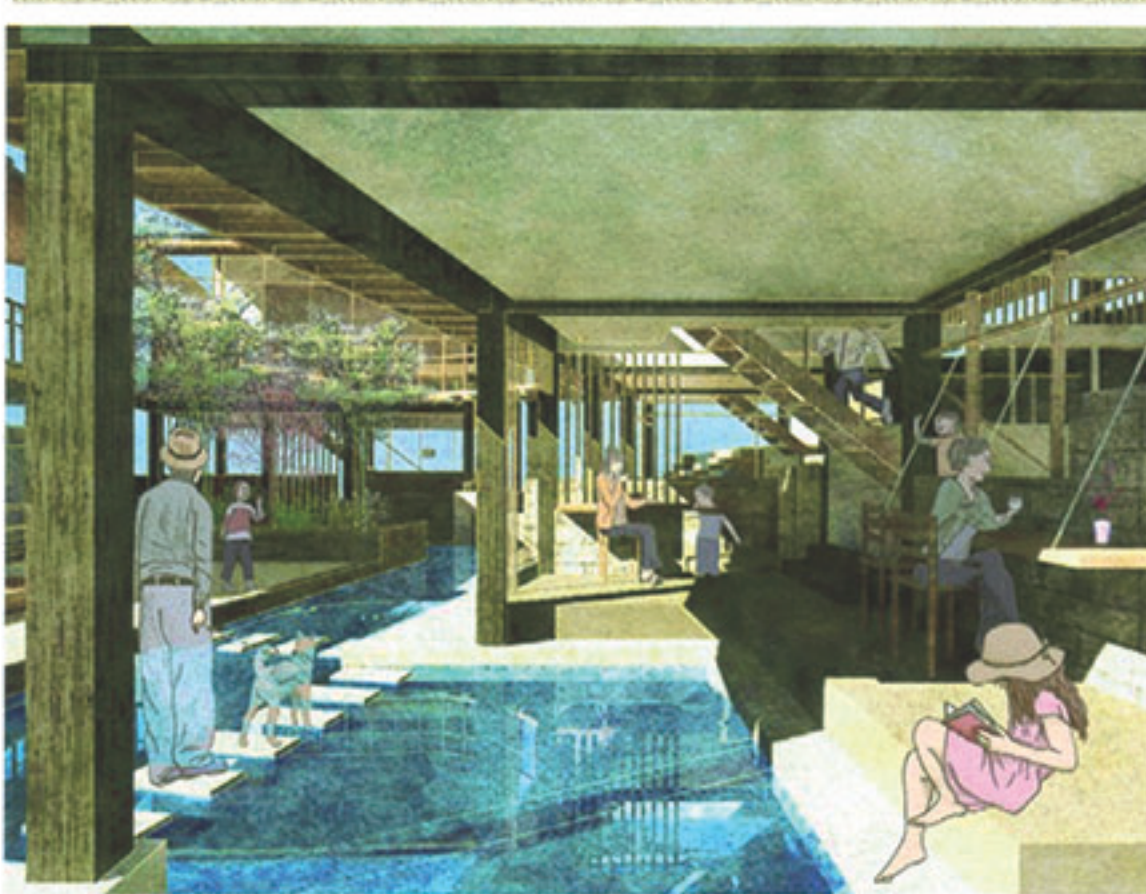
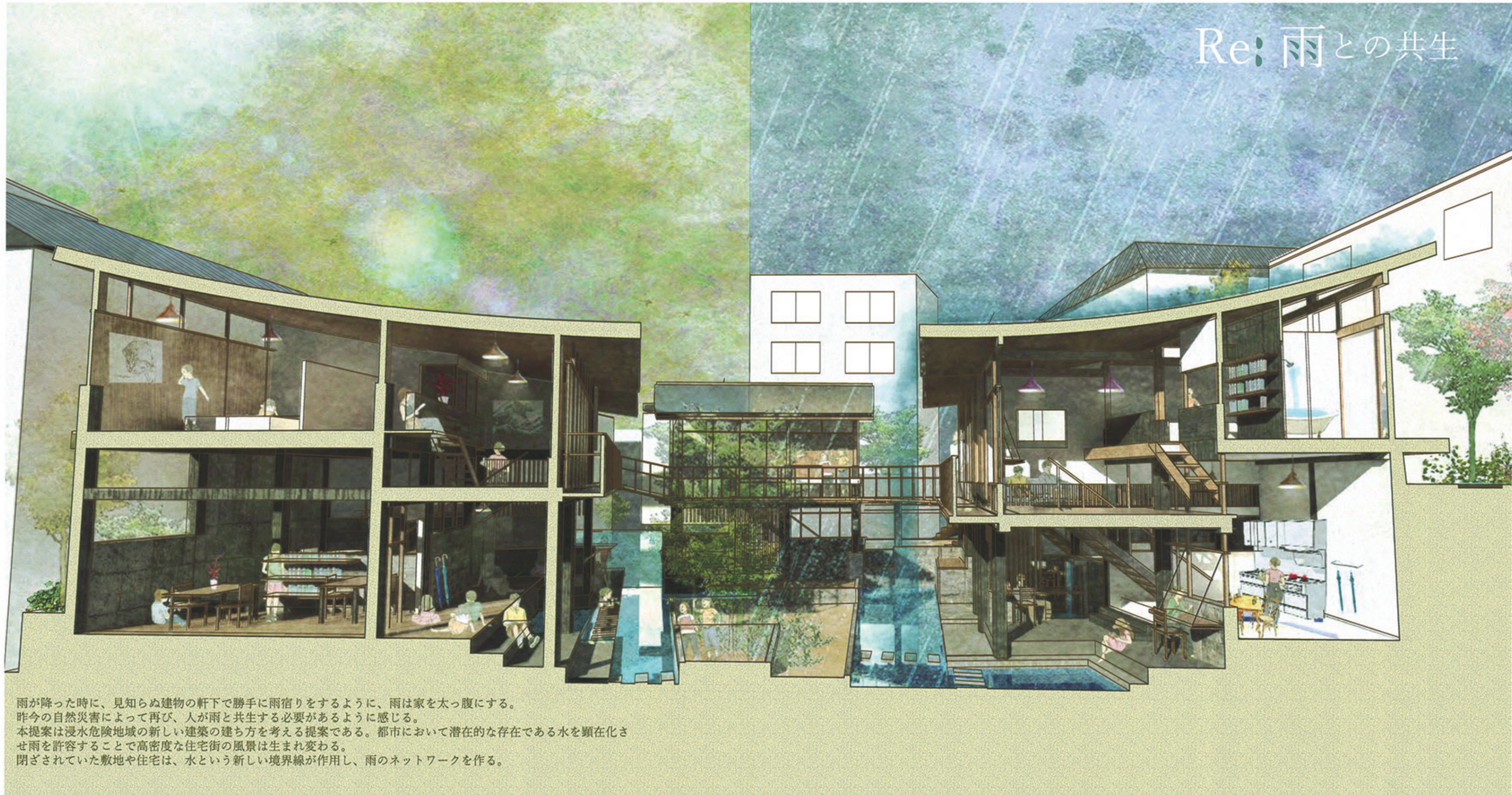
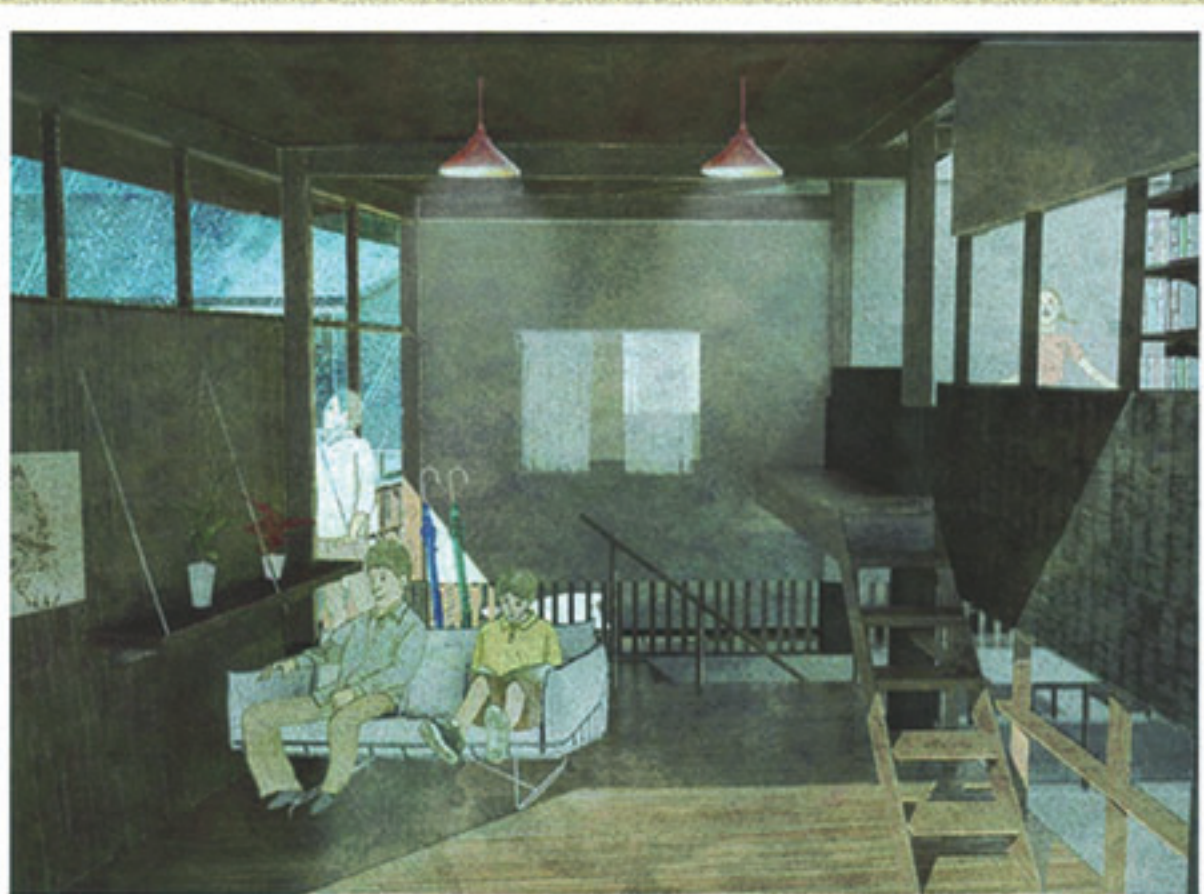




晴れの日：雨の翌日土間は PUBLIC となり主婦が気まぐれにカフェを営む。



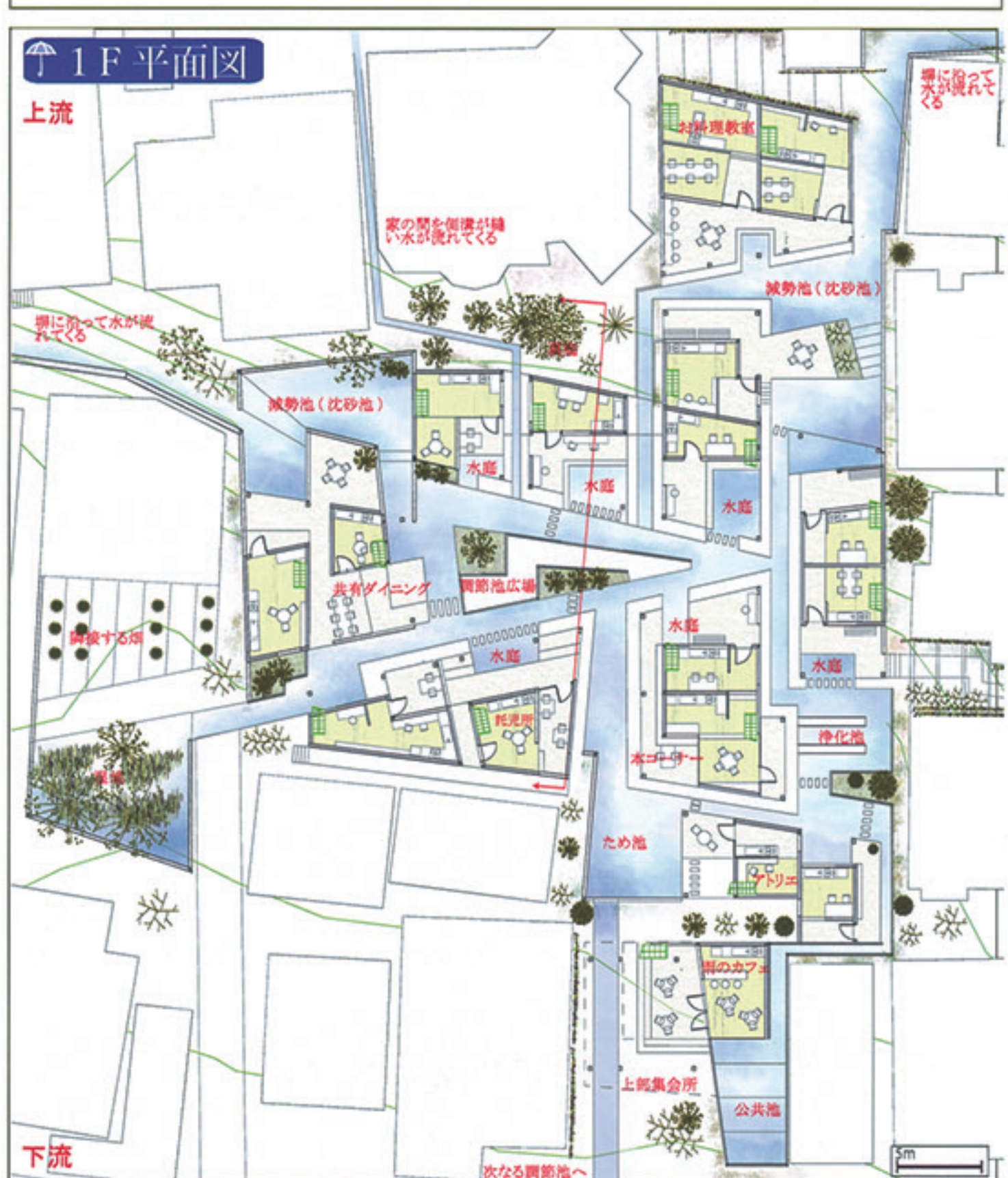
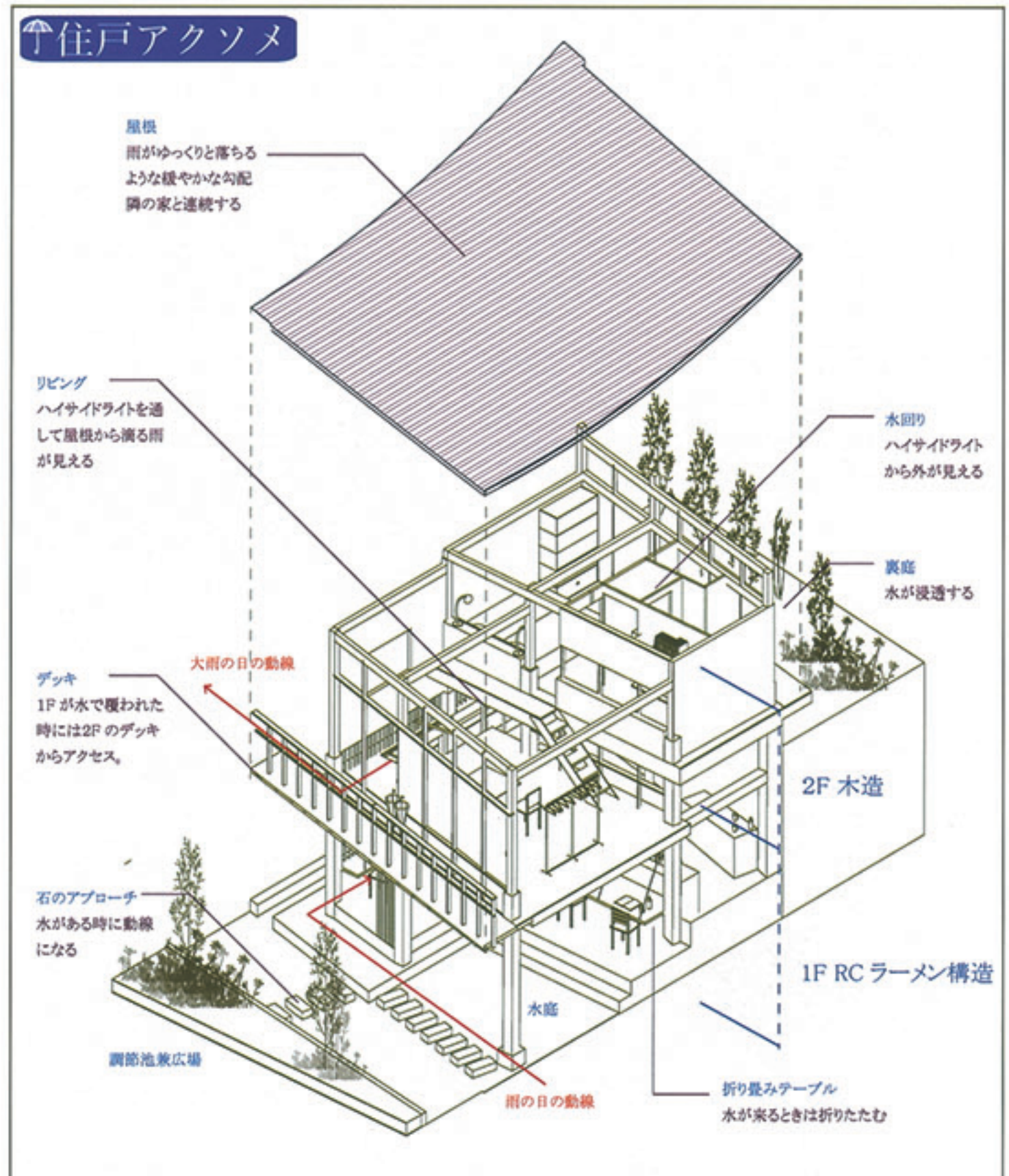
晴れの日：広場が住宅の1Fに貫入し、土間空間は地域の託児所として利用。



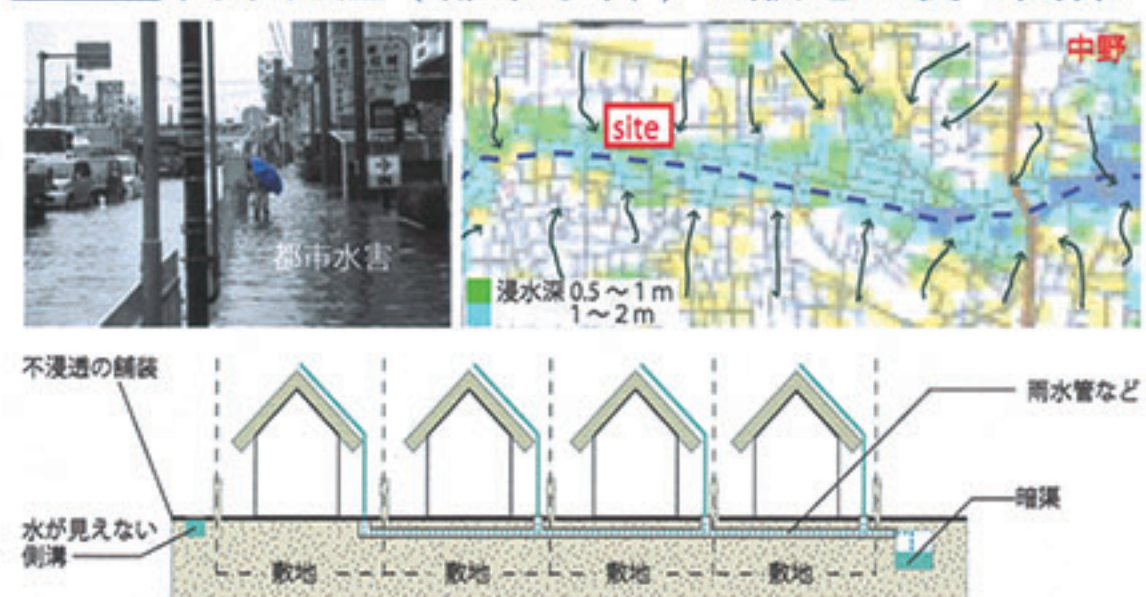
雨の日：2Fでも、屋根から滴る雨が感じられるような空間の繋がり。



雨の日：雨道を紹介してお隣同士が一体的に繋がる。デッキは大雨時の動線となる。

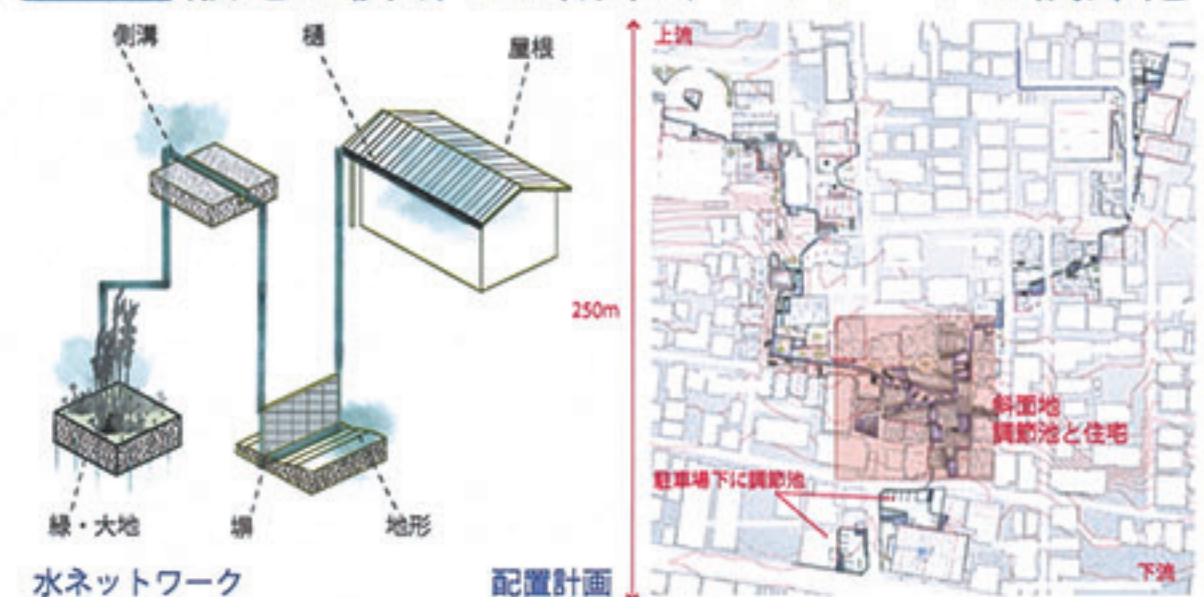


01 内水氾濫（都市水害）と敷地主義の関係



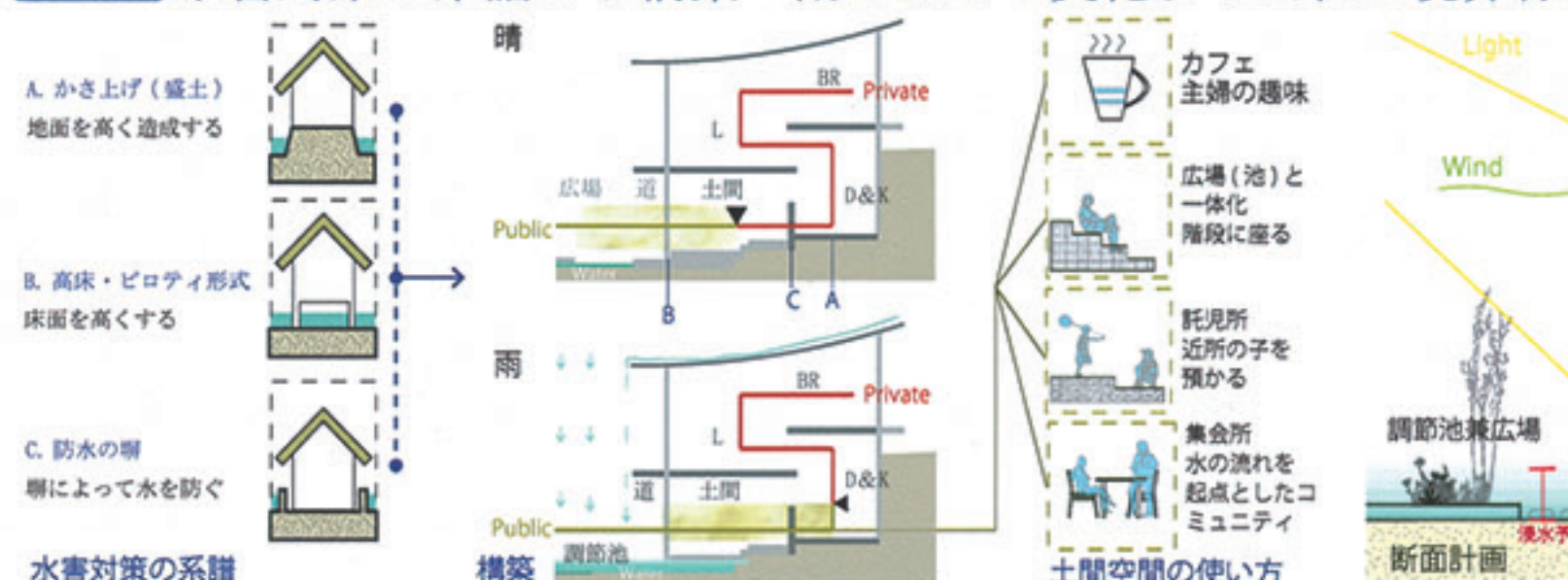
東京は微地形があり高密度な都市で、潜在的に都市水害（内水氾濫）の危険がある地域が多数存在する。中野もその一つの例で、谷によって低地に水が集まる都市構造である。現代の都市では、敷地という概念が強く、家同士の境界は閉ざされており水の流れは潜在化されている。人工的な排水のみに依存しているため都市は雨に弱い。

02 敷地を横断した雨水ネットワークと調節池



水害対策のケーススタディとして中野2丁目に地形を下る水を集める流路と、それを貯水する調節池を配置する。この時、地形を読みながら住宅街にある建築・土木・自然を改変することで敷地を横断するような地域の水を可視化し水ネットワークを生み出す。水の動きが速い斜面地に調節池とそこに暮らす人々の生活風景を集合住宅として提案。

03 水害対策の系譜から構築：雨によって変化する公私の境界線



既存の水害対策の系譜から3つの手法を組み合わせ、雨によって空間が変化する段々状のスキップフロアのような形式。外部空間である土間空間は広場から段を登るように構成されているため、段々水が土間に貫入する仕組みとなっていて、雨が降ると広場や道に存在していた公共性が土間に入り込んでくる。雨によって公私の境界線がセッバックするため、土間は天候に応じてフレキシブルに利用する。

04 土間と調節池広場が育む雨のネットワーク



1. 生活の向きと土間のネットワーク
住戸は土間を介して調節池兼広場に向くように配置することで水を意識するプランとなる。土間は隣の家や向かいの家とネットワークを作る。
2. 晴の日の PUBLIC
広場は普段PUBLICなゾーンとなっており公園のように誰でも入れる。広場と一体的な外部空間である土間から室内空間へと徐々にPrivateに切り替わる。
3. 雨の日の PUBLIC とデッキ
雨の日は調節池が浸水するため、雨がかからない土間の空間がPUBLICとなる。大雨の時は2Fのデッキを通り各住戸へアクセスできる。